

## 「唾」再考

今西浩子

〈序〉

ツバ=唾はツバキの下部省略形であるらしい。このことは、ツバキが室町時代の、『明応五年本節用集』、『易林本節用集』や、『日葡辞書』、『交隣須知』などから見えはじめるのに対して、<sup>(注1)</sup>ツバの方は、同じく室町時代の日葡辞書に一例みられる程度で、近世になってから、次にみるように、その用例が急増していることからいえる。

○汝面に。つばはく事は。怒<sup>いかり</sup>に依ってなり。(['見ぬ世の友』三)

○つばを付ケ漸く射しる勢田の橋

(['日本史伝川柳狂句』六)

○<sup>つば</sup>唾を吐て其患即ち除く。(['目ざまし草』)

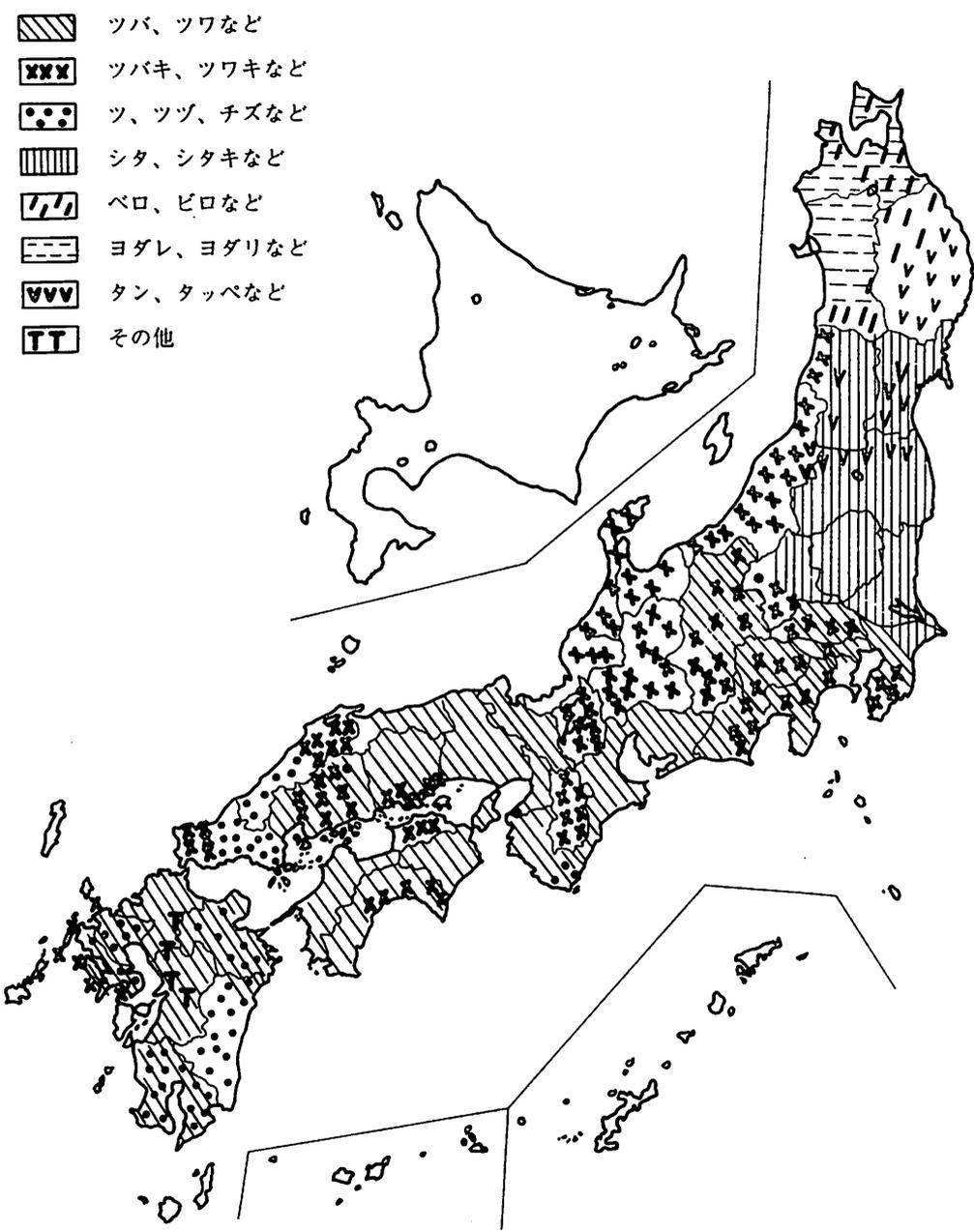
○TSZBA, or TSZBAKI (['和英語林集成』初版)

○つば 江戸でつわといふ つばきのことなり。(['浪花聞書』)<sup>(注2)</sup>

また、次の方言地図(第一図)をみても、ツバキ、及びこれと同一起源と思われるツワキ、ツバケ等は、ツバによって、関東・北陸と山陽・山陰とに分断されたとよみとれるので、唾の意味でのツバキ>ツバの線はまず動かないであろう。

しかし、このツバキの語構成は、「ツ・ハキ」なのか、「ツハ・キ」(もしくは「ツハ・ハキ」)なのかについては、いまだ両説があってどちらの説が優勢ともいえないのが現状である。比較的近年の二、三の文献についてみても、例えば『時代別国語大辞典・上代篇』や『日本国語大辞典』では、「ツハ・キ」説をとっており、『日本言語地図3』の解説では、「ツ・ハキ」説を採っている。また、堀井令以知編『日本語語源辞典』のツバキ=唾の項目では、「ツバは唇のこと。キは体内より発する液体のこと。九州北部の方言では、ツバは、唇。唾は唇の液ではなく、舌の液だからシタキ、クタキのような方言が正しい命名。『口中にキミズがたまる』のようにいうから液体のこと」と、「ツハ・キ」説をとり、佐藤享氏は、論文「『唾』の語誌」<sup>(注3)</sup>の中で、文献と方言とを詳細に比較検討した結果、「ツ・ハキ」説を提唱している、といった具合である。

この佐藤氏の論文の中で、現在の諸説は検討され尽くされていると思われるが、その解釈面で筆者とは少しいち違点もあるゆえ、本稿は佐藤氏の論文を踏まえた上で、この問題をもう一度考えなおしてみようとするものである。



第一図 つば(睡)

(日本言語地図118図から)

なお、佐藤氏の論文には、文献からの用例が詳しく提示されているので、本稿の用例もここから引用させてもらったものが多いことを断っておきたい。

〈一〉

筆者が佐藤氏の論文で納得しえない点は、佐藤氏がツハの語形の古例がないとしていることである。佐藤氏によれば、ツハは室町時代を待たなければ出現せず、その室町時代についても、ツハと表記しながらもツワと発音したのではないかという疑いもたれ、ハ行に転呼したツワの他にツハという語形がはっきりと認められるのは、近世になってからだという。したがって佐藤氏によれば、ツハ、ツワは、ツハキ、ツワキよりも新しい語形ということになる。

しかし、私見によれば、ツハの語形は既に平安時代に存在している。しかしこれは、次の二つの用例の解釈の仕方による差といった方がよいかもしれない。

(1) 嘔 口水也、液也、唾也、与太利又豆波志留 (天治本『新撰字鏡』)

(2) 弁を <sup>ツハキ</sup>吐 (東大寺本『地蔵十輪経』元慶点)

佐藤氏は(1)について、「このツハシルの解釈は種々なされうると考えるが、ここではツ・ハシル(ツ走る)と考えておく」(2)について、「ツハは管見では平安時代に他に例をみないので、ツハキの省略表記(つまりツハキハキのキが落ちたもの)と一応考えておきたい。(波線筆者)と述べられている。(2)の「他に例をみないので」ということは、(1)の認識から当然ということになるが、(1)を「ツハ・シル」(ツハ汁)と考えることも十分可能で、この可能性を最後まで否定して論を進めているところに問題がありはしないだろうか。また(2)についても、「一応」とことわりながらも、最後までその論で通されているところに問題があろう。

一方、佐藤氏が最も古い語形とされているツは、平安時代に次のような用例をみる。

○吒 イカナル ナケク ツ シタウチ タ、 (観智院本『類聚名義抄』仏中)

○咤 ツ シタウチ ツイハム (同上 仏中)

○吒 ツ 口中液也 咤同 (黒川本『色葉字類抄』中)<sup>(注4)</sup>

○唾 都波岐、口中津也 (十卷本『和名抄』)

○液 小児口所出汁也、豆波支、温也、津也、汗也 (享和本『新撰字鏡』)

などその用例は多い。<sup>(注5)</sup>

ところで、先の第一図について、ツ系、ツバキ系、ツバ系の三者についてその関係を見ると、九州あるいはこれに近い山口、島根辺りでは、ツ系の地域にツバ系が侵入したと読みとることができる。しかも、ツは九州地方に独自に発達した語形のように

見えるが、広島、和歌山、福島などにも少数地点ながら見られることから、かつては全国的に広がっていたものが、ツバキにとってかわったと考えることができる。また次の第二図の方言地図にみるように、出雲地方や、南紀に、涎を意味するツ系の語が残っていることから、唾と涎との意味の混同があるとはいえ、これも同一語の残存とみることは、文献からみても、方言からみても、唾を意味する語の古形の一つがツであったことを認めることになる。

そこで、ツからツバに至る過程であるが、それを、「ツ・ハキ」説をとる『日本語地図』は次のように説明している。

古くは身体の部分とそこから出る液体の区別があいまいであり、ツのような語形があった。のちになって体液についての特称が求められ、「唾」であることも明確にするために「吐き」をつけて示すようになった。(中略)さらにキが脱落した。つまりツ>ツハキ>ツバキ>ツバといった過程を考えるわけであるが、先の第一図ならびに次の第二、三、四図をみても、ツの語形は液体を意味する、唾、涎の語形にのみ現れて、身体の部分を意味する、唇、舌には全く現れてこない。ツバキも同様であるが、ツバは液体にも、身体部位にも用いられている。このことから、ツは初めから液体専用の語ではなかったかと考える。この点、ツ(唾)+ハク(吐)>ツハクの名詞形としてツハキを設定した佐藤氏の説(これは『日本釈名』や『古事記伝』『大言海』などに通じる説であるが)の方が妥当といえよう。しかしこの佐藤説にしても、ツがあるにもかかわらずツハキという語が新たに生じた背景は何であろうか。考える理由の一つとして、ツが一音節で不安定であることが考えられる。が、そういった場合は、大抵はじめの一音節語は使われなくなるのが普通である。(たとえば足を意味するアはアシが生じた時点から熟語の中以外では使われなくなっている)ところが、ツはむしろ次にみるように、室町時代になって用例が多くなっている。

○<sup>ツ</sup>咤 口出水、<sup>ハ</sup>嘔 (『温故知新書』)

○<sup>エキ</sup>液 ツハキ アセ ツ ヨダリ (慶長十五年版『和玉篇』)

○津 口汁 (天正十八年本 正宗文庫本 黒本本『節用集』)

○Tçu. I, Tçubaqi (『日葡辞書』)

○tçu vo fagi, u (コリヤード『羅西日対訳辞書』)

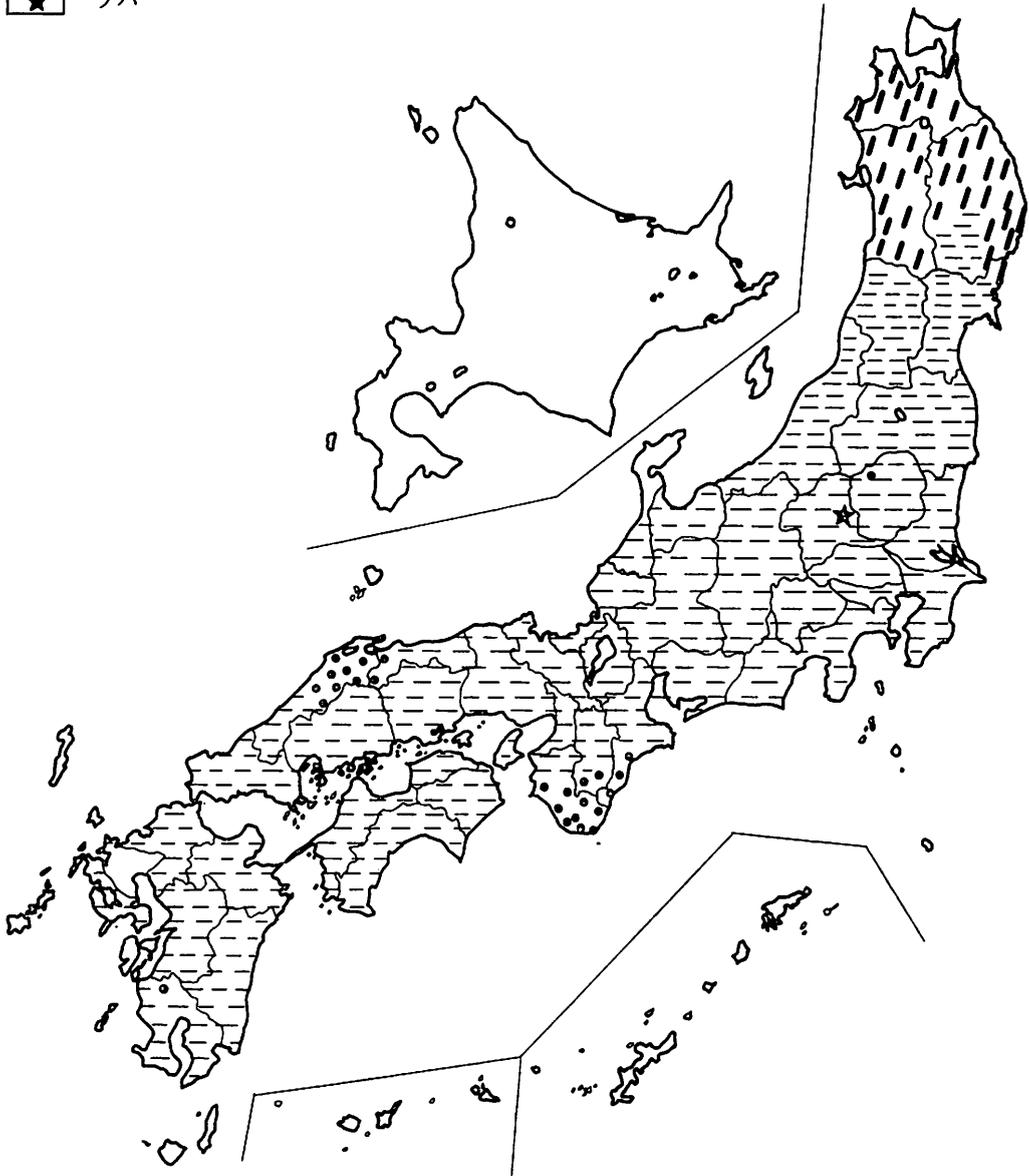
○卯月のこずゑしげるなるに、青梅がなつたぞ。みる人ごとにつをひく。

(『古本能狂言集』「梅の舞」)

○<sup>あま</sup>青梅の折りえだ、つがつつが、やこりよ、つがひかるゝ。

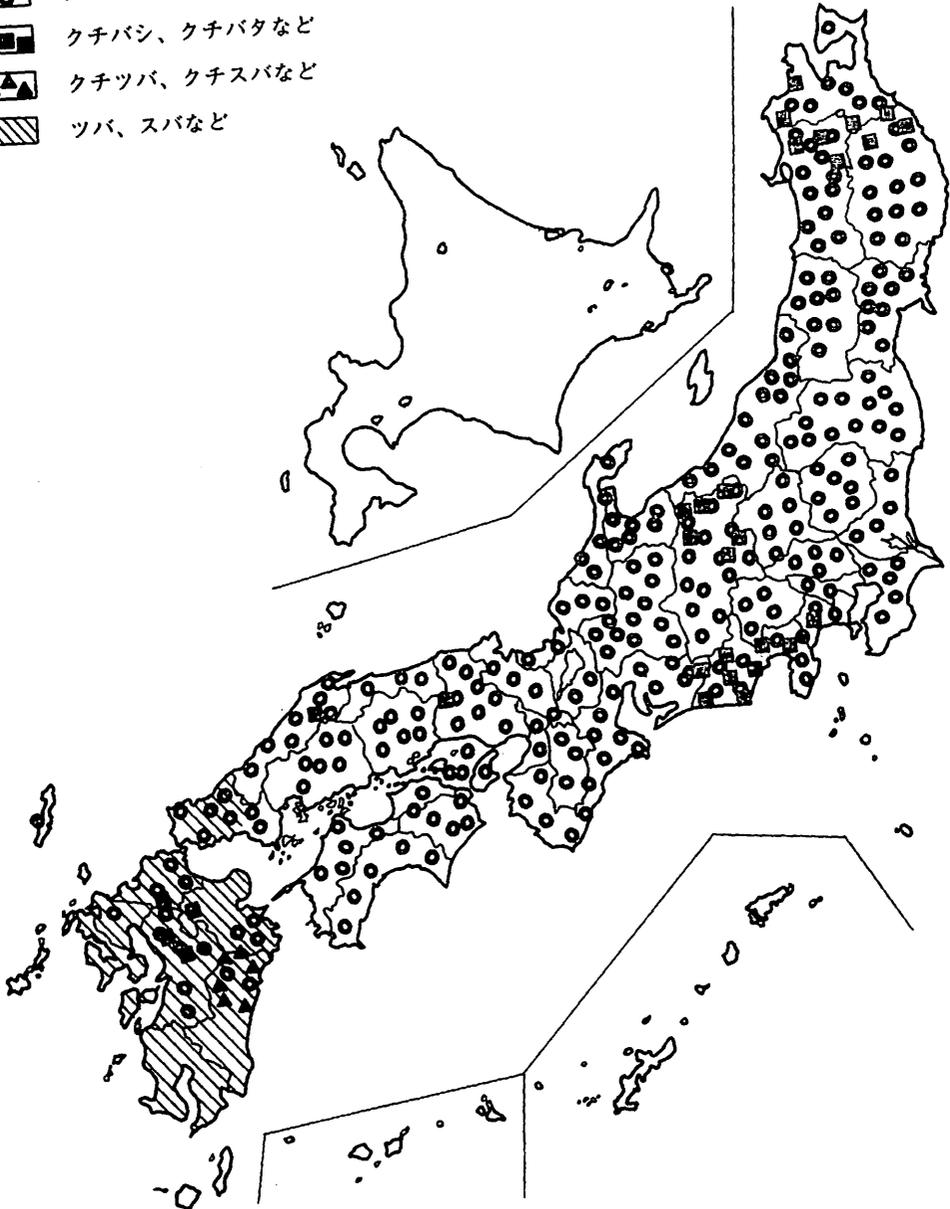
(『閑吟集』)<sup>(注6)</sup>

-  ヨダレ、ヨダリなど
-  ペロ、ピロなど
-  ツ、ツツなど
-  ツバ



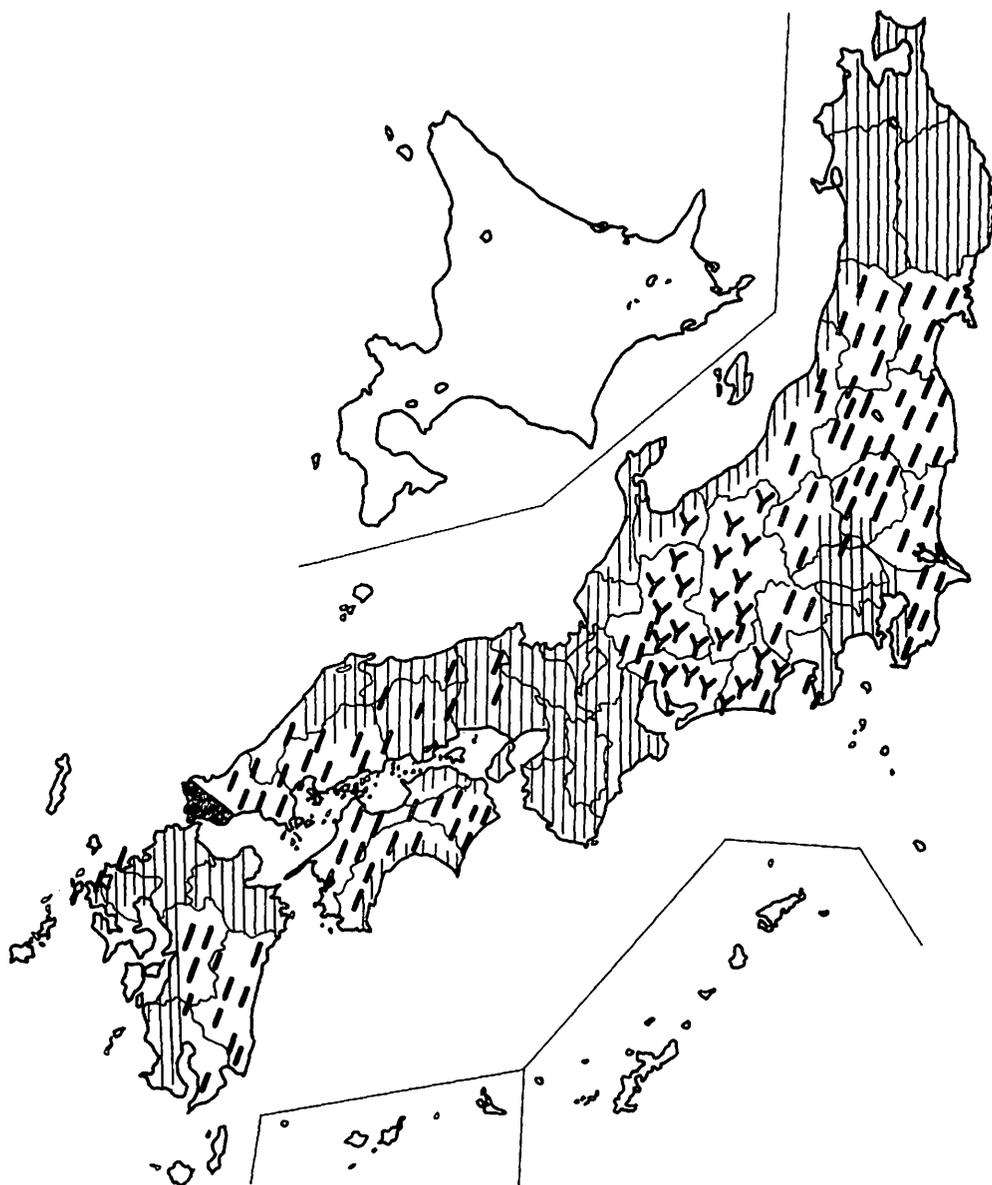
第二図 よだれ (涎)  
 (日本言語地図119図から)

-  クチビル、クチビラなど
-  クチバシ、クチバタなど
-  クチツバ、クチスバなど
-  ツバ、スバなど



第三図 くちびる(唇)  
 (日本言語地図116図から)

-  シタなど
-  ペロなど
-  シタペロ、シタペラなど
-  ツバ、スバなど



第四図 した(舌)

(日本言語地図117図から)

とすると、あるいは、ツとツハキとを同一起源ときめてかかるところに無理があるのではなからうか<sup>(注7)</sup>。

## 〈二〉

上のように、ツとツハキが共に唾を意味する別語という一つの仮説に立って考えを進めてみると、唾の語誌はどのように変わってくるのであろうか。これが本稿の主たる課題でもある。

またその場合、ツはひとまず置くとして、ツハキの語構成は、必然的に「ツハ・キ」ということになるが、ツハ及びキの担う意味は何であろうか。

先に見た『新撰字鏡』のツハシルを「ツハ汁」とみるならば、ツハは口、もしくはそれに近い意味をもつ語ではないかと推測される。第三図にみる通り、ツバは唾を意味する以外に、唇を意味する語として九州地方にめだつが、そのツバの前身がツハだったのではないか。ツバは唾、唇以外の意味としては、わずかに涎を意味する語として群馬に、舌を意味する語として山口に存在するにすぎない。しかも、涎と唾とは共に口から出る液体という点で共通しており、また舌と唇とは共に口の一部位であり、そこから液体を出すという点で共通しているので、涎と舌のツバは特定の地域でのみ生じた意味の混同、分化とみるならば、基本的には唾、を表すツバと、唇を表すツバとの二つの異なるツバがあり、ツハは、唇を意味するツバの前身と思われる。

ただし、これを文献上で確めようとした場合、ツバが九州方言であることが『日葡辞書』の「Tuçba 唇 下(X.)の語」という注記でわかる程度で、これより上の時代のことは定かではない。しかし、佐藤氏は、「これらの地域では同時にツバ＝『唾』をも意味していて、『唾』と『唇』が同じ語形である点に興味が引かれる。しかも、ツバに似た語形、即ちツバ類が奄美・沖縄にまで及んでいて、ここでも『唾』と『唇』とを区別しておらず、その古さが知られる。従って『唇』をあらわすクチビルは後の時代のものとなろう。」と述べられている。だが、クチビルの方も、既に『新訳華嚴經音義私記』『和名抄』『三宝絵詞』<sup>(注8)</sup>などで平安時代から使われているので、それほど新しい時代の語でもない。佐藤氏は更に続けて、「それはともかく、ツバ＝『唾』が文献に見出されるのが比較的新しい点に問題が残ると考える」と述べられているが、ツハをツバ＝唇の前身と考えれば、ツバがクチビルより古いとすることにも矛盾が生じないように思えるがいかがなものであろうか。

そうはいうものの、ここで逆にツバ＝唇の方がクチビルよりも新しい、ということ

が考えられうるか否かについて検討を加えておくことも必要であろう。もしこの可能性があれば、ツバ=唇の前身がツハだということも成り立たなくなるからである。

クチビルのような「クチ××」といった語形は、第三図にみるように、他にクチバタ、クチバラ、クチツバ、クチスバといったものがある。これらはいずれも、「口の端」を意味するようで、ツバ=唇がクチツバの前半部分が脱落した語であるとすれば、クチビルよりもツバ=唇の方が新しい語ということになる。そしてその場合の、クチツバのツバはおそらく「大名借をせず、買置きをせず、拾貫目をつばにして、町人の慥成を見たてて、しかも利を世間より心安くして、金銀をまはし」(『日本永代蔵』)の場合に近いツバ、すなわち「限度」「かぎり」といった意味をもち、唾の意のツバとはまた別の語となろう。

ところが、第三図をみると、クチツバは、クチビルとツバ(あるいはスバ)との接点である東九州の一部にしか分布していない。これは、唇を意味するクチツバの後半部分が独立したというよりも、クチツバの方こそ、クチビルとツバ=唇とのコンタミネーションによってできた語と考えられる。さらに、これは第三図からよみとれることはできないが、宮崎と熊本との県境に、ツバ、クチビル、ツバビルの三つの語形が併存しており、また沖縄本島の真喜屋付近でも、クチビルと共にスバビルの語形が見られることなど、ツバがけっしてクチツバの後半部分が切り離されてできた語でないことを暗示している。だとすれば、結果はやはりツバ=唇が古くからあったというところに落ち着く。

一方、ツハキの後半部分のキの意味は何であろうか。柳田国男や<sup>(注9)</sup>『日本語語源辞典』では、キを液体をあらわす語としている。

唾を意味する方言の中にはシタキのような語もあるので妥当な解釈かとも思えるが、それにしても、ツハ=唇+キ(液体) > ツバキ (=唾) > ツバ (=唾) のように、一担結合したツハとキとが再び分離するというのは、普通の語の発展過程に照らしてみても納得しがたい。むしろツバキの類推から、キが液体を意味するという民間語源が生じ、そこからシタキなる語も生じたとみた方がよいのではないだろうか。

ツハキのキが液体を意味するのでなければ、次に考えられることとしては、ツハハクの連用形ツハハキからの転成名詞で、語中のハが一つ脱落したとする見方がある。ツハハクの語形は、本稿〈一〉でも示した通り、東大寺本『地蔵十輪経』元慶点にもみえるから、これをそのまま「ツハ+ハク」とすれば、この解釈が成り立つ。(佐藤氏はこれを「ツハキ・ハク」のキ脱落とみることを前に述べた。)

だが、『時代別国語大辞典・上代篇』や『日本国語大辞典』は、これと似ているが、

やや異なる解釈を示している。つまり、ツハという語形を動詞として活用させたツハクの名詞形とするものである。いずれにしろ、この方がキを液体の意味とするものよりも信憑性があるように思えるがいかがなものであろうか。

### 〈三〉

唾を意味する語として、ツハハクもしくはツハクに由来するツハキ>ツバキ>ツバがある一方、本来別語として、一まず考察の対象からはずしたツの語源については、一つは先の注5にも見たように、佐藤氏の説、つまり舌打ちの音から唾を表す語に転じたとみる見方がある。が、いまひとつ未だ想像の域を出ないが、ツ自体が、本来「水」=液体を意味した語ではなかったかと考える。それは、次にみるように、アジアの言語の中には「水」を意味する語で、語頭に t、d の音をもつものがあり、<sup>(注10)</sup>

toya	インドネシア語
tubig	タガログ語
twk	カンボジア語
tui	ビルマ語
ti	ベンガリー語
tanni	中央インド語
dac	モン語
dah	中央インド語

中本正智氏によると、日本語の「みづ=水」は古くは、ミ、メ、ム、モ、などの m 鼻音系の一音節語であった可能性があるということである<sup>(注11)</sup>。あるいは「みづ」は、ちょうど「さつ矢」という語が、共に「矢」を意味する「サツ」と「ヤ」との複合によって成立したように<sup>(注12)</sup>、この m 鼻音形と、ここにいうところの t、d 系との複合によって成立した語かもしれない。そしてツは、一音節という不安定な語であるにもかかわらず、ツハキ、ツバキ、ツバと共存して唾を表す語として生き続けてきた。現代方言の中には、ツ一、ツズなどの語形がみられる。これらは、ツが一音節の不安定な語形であるために出現したものと思われるが、それほど普及することなく、結局ツが過去、現在（方言）を通じて強い勢力を保ってきたと考えることも出来るのではなかろうか。

〈四〉

佐藤氏は、言語地理学資料と文献国語史資料とを詳細に検討した結果、唾の語誌を次のように考えた。(表Ⅰ)しかし、本稿での考察の結果、筆者はこれを表Ⅱのように修正できるものとする。ツハキはハ行転呼してツワキになる一方、母にハハとハワの両形があったように、一部はツハキのまま残り、ツハケやツハ、あるいはツバキやツバへ変化していったものもあったのではないか。唇の意のツバについても、ハ行転呼する前に濁音化してツバになったのか、あるいは唾の場合同様一部がハ行転呼しないで残ったのかについては不明である。

〈五〉

前章までで唾の考察は一応終わった。しかし、現代の方言の中に唇を意味するツバの異形としてシワのあることはハ行転呼する以前のシハなる語があったのではないかと思われる。そこでシハ=唇の語形を考える時に思い起されるのは次のような、山上憶良の貧窮問答歌の一節である。

糟湯酒うちすするひて<sup>しはぶかひ</sup>之匠夫可比鼻びしびしに… (『万葉集』巻五892番)

ここにいうシハブクはくしゃみをする事。「シハ(唇または口)+ブク(吹く)」から出た語と思われる。『時代別国語大辞典・上代篇』でも

(しはふく)は中世に用いられたスハブキの古形か。そのスハは中世以来文献に九州方言とし<sup>(注13)</sup>、現在も九州などで、スバ、スバ、ツバ等の形で用いられる唇の意の語と考えられる。シハブルのシハとともに、これらの形の古いものがシハなのであろう。

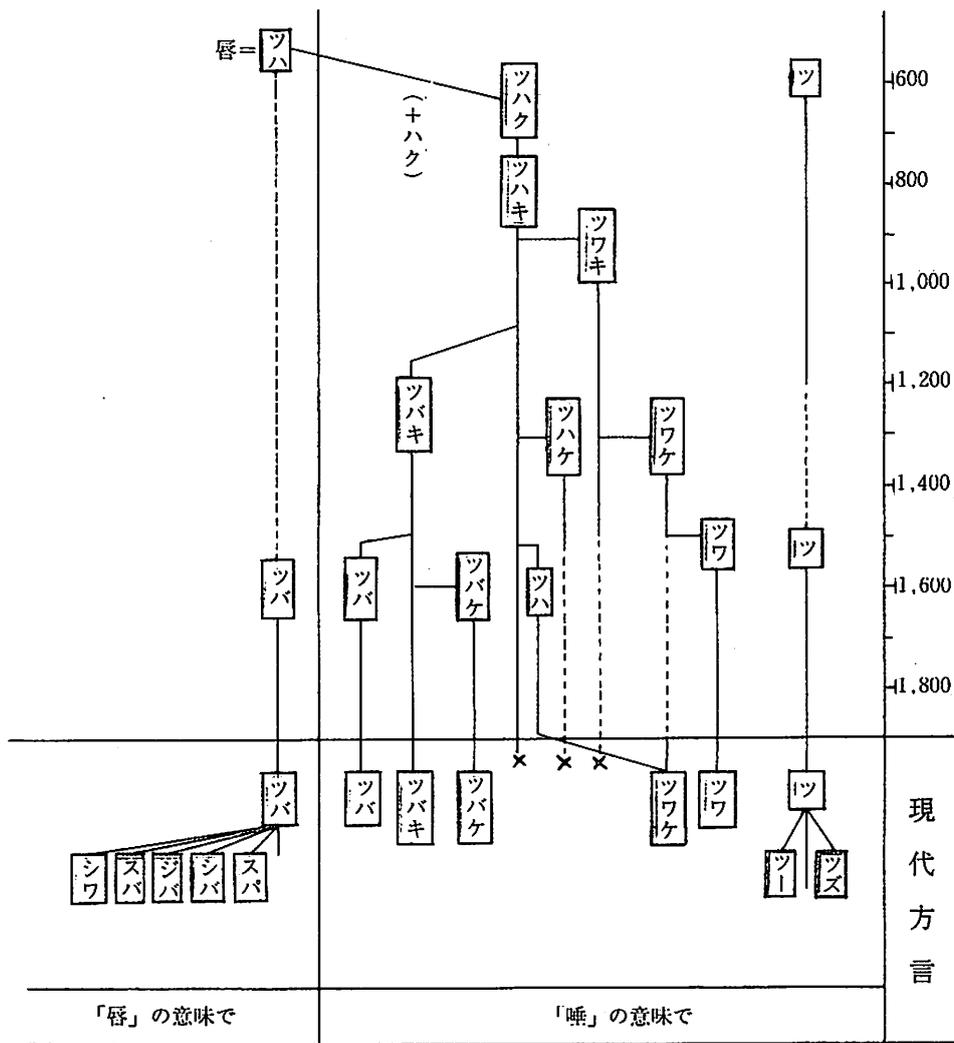
と記されている。もっとも、ツハとシハとの新旧如何ということになると、文献資料ではシハの方が古いことになるが、閉鎖音→破擦音→摩擦音という音韻変化の通常からいくと、

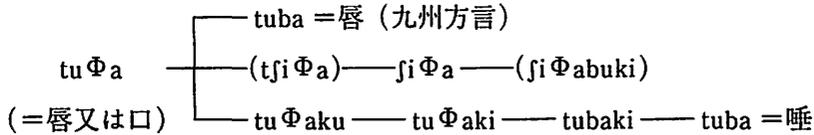
tuΦa>tʃiΦa>ʃiΦa

の方向で変化したと考えた方がよさそうである。すなわち、唇(または口)を表すツハなる語が古くあり、そこからシハブク、スハブキのシハ、スハが派生する一方、ツハク(またはツハハキ)>ツハキ>ツバキ>ツバの過程を経た唾の意のツバとツハ>ツバの変化にとどまって唇の意を表すツバとに分れていったと考えられる。

この点を考慮すると、ツハ=唇は次のように変化したと考えられる。<sup>(注14)</sup>







〈結語〉

ツとツハとは共に古代から文献にみられるので「ツ・ハキ」か「ツハ・キ」かはどちらともきめ手がないまま論議が平行線を保ってきた。佐藤氏の論文は、その意図するところは、文献国語史資料と、言語地理学資料とで語誌がどのように変るか、そしてその長短をみるところにあったようだが、結果的には、「ツハシル」を「ツ・ハシル」「ツハハキ」を「ツハキハキ」と解釈することによって、「ツ・ハキ」説を有力に押し進めることになった。本稿はむしろこれとは逆に、ツとツハとを別起源の語と考えることによって「ツハ・キ」説を押し進めたものである。

ツは唾を表す本来の語と思われ、ツハは唇を表す語でシハとも関連をもつ語であるが、ツハキの形になって、唾を表す語として専ら用いられ、ツバキを経て現代共通語のツバへと発展したとみられる。

一方ツハ=唇の方も、ツバの語形に変化して近世まで勢力をもっていたが、ツバ=唾との衝突が生じてからは、九州方言にその用例を残すにとどまった。

ツも不安定な一音節語ながら、近世まで勢力を保ってきたが、より安定した二音節語ツバ=唾が生じるに及んで、方言の世界にのみ残留し、ツズヤツーのような二音節語を派生しながらいまなお生き続けている。

こういったところが本稿の考察から得られた結論あたりにならうか。考察の不十分な面も多々あるが、大方の御叱正を賜れば幸いである。

(注)

1. 鎌倉時代のものについては、大系本『宇治拾遺物語』七三「範久阿闍梨西方を後にせぬ事」に「つばき」とあるが、底本には清濁の表記がないということであるから、正確にはわからない。逆に清濁表記がないだけに、ツハキとかかれていてもツバキであった可能性もある。だとすれば、ツバキの初出はさらにさかのほる。
2. 以上の用例はすべて後に記す佐藤享氏の論文によった。
3. 佐藤享『「唾」の語誌—言語地理学資料との相関—』（平山輝男博士古稀記念会編『現代方言学の課題』第三卷所収）

以下、佐藤氏の論文という場合にはこれを指す。

4. 以上の用例は佐藤氏の論文による。
5. 『名義抄』の二例から、「『ツ』は本来は口中の舌打ちをさし、そこから『唾』をはく音を擬した語であって、後に『口液』『つば』の意を示す語に転じたものと考えることができる。」との佐藤氏の見解が示されているが、たとえそうであっても、後の三例から、平安時代に唾を意味する「ツ」が既にあったことがわかる。
6. 以上佐藤氏の論文による。
7. むしろツが一音節語であること不安定さをカバーする意味で、ツズ、チズ、ツーなどの語形が生じたと思われる。しかしこれらの語は、結局ツと長く共存することツにとって替ることもなかった。
8. 用例は『新潮国語辞典』による。
9. 柳田国男『国語の将来』、『定本柳田国男全集』18巻
10. 中本正智『日本語の系譜』375ページ
11. 注10の書
12. 大野晋氏は、サツ矢のサツは矢の意味で、朝鮮語 sal (矢) と同源とする。(日本古典文学大系『萬葉集』一、巻1—61番歌の頭注。)
13. 中世の文献国語資料の代表とされる『日葡辞書』にはスワの語形はみえない。
14. 中本正智氏の前掲書232ページによると「朝鮮語の舌はヒャ hjə、またはヒャスパタク hjəspatak である。古くさかのぼるとシャスパタク sojəspatak である。これが短縮されると日本語のシタとつながる。なお、琉球列島で舌をシバという方言があるが、同じく朝鮮語につながる語である。」ということである。とすると、シハやシバは唇ではなく舌につながる語ということになるだろうか。現代の方言にも舌を表すのにツバといたり、逆に唾をシタキといたりしている地方がある。筆者は先に、舌と唇との類似から混同したのであろう、と述べたが、あるいは舌も唇も元来同一語で区別されていなかったということがありうるのであろうか。今後の問題としたい。

〈参考文献〉

1. 平山輝男博士古稀記念会編『現代方言学の課題・三』(明治書院・1984, 6)
2. 中本正智『日本語の系譜』(青土社・1985, 7)
3. 堀井令以知編『日本語語源辞典』(東京堂出版・1982, 8)
4. 国立国語研究所編『日本言語地図・3』(縮刷版 大蔵省印刷局・1983, 6)

5. 『時代別国語大辞典上代篇』(三省堂・1968, 12)
6. 『邦訳日葡辞書』(岩波書店・1980, 5)
7. 『新潮国語辞典』(新潮社・1965, 11)
8. 『日本国語大辞典』(小学館・1976, 3)

## 追記

筆者は以前に「『唾』考」と題する小論を書いたことがある。(『昭和学院短大紀要』第12号・1977, 3) ツ系とツハ系とを別に考えた点などは本稿と同じであるが、旧稿ではシハとツハとの新旧を s - t の交替例を傍証にシハ>ツハとしていたのを、本稿では破裂音→摩擦音といった一般的な音韻法則を適用したツハ>シハとした。しかしこの点については未だ筆者自身に迷いがある。が、それはともかく、旧稿では論証のあいまいさや、論の飛躍がめだったので、本稿はその点を書き改めたつもりである。本稿を「再考」と名づけたのは、諸説に対する再考であると同時に、旧稿に対しても再考であるという意味を含む。

(いまにし ひろこ・横浜市立大学助教授)